

京都大学総合博物館2019年度特別展
『文化財発掘VI－幕末・近代の出土文字史料－』
関連講演会資料

近・現代の考古学と 京都大学構内遺跡

伊藤 淳史

(京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門)

1

<講演の構成>

・ 1 「近・現代の考古学」とは？

そもそも、考古学とはどのような特徴の学問なののでしょうか。そのなかで「近・現代の考古学」とはどのような位置づけになるのでしょうか。まず考えてみます。

・ 2 近・現代の考古学の事例－注目される成果から－

列島内での近・現代遺跡の発掘調査や、出土遺物の研究の事例について、そのあゆみや注目されるものを紹介します。

・ 3 近・現代の考古学と京都大学構内遺跡

京都大学構内において、近・現代の考古学の対象とされてきたものには、どのようなものがあったのでしょうか。これからの課題も含めて紹介します。

1. 「近・現代の考古学」とは

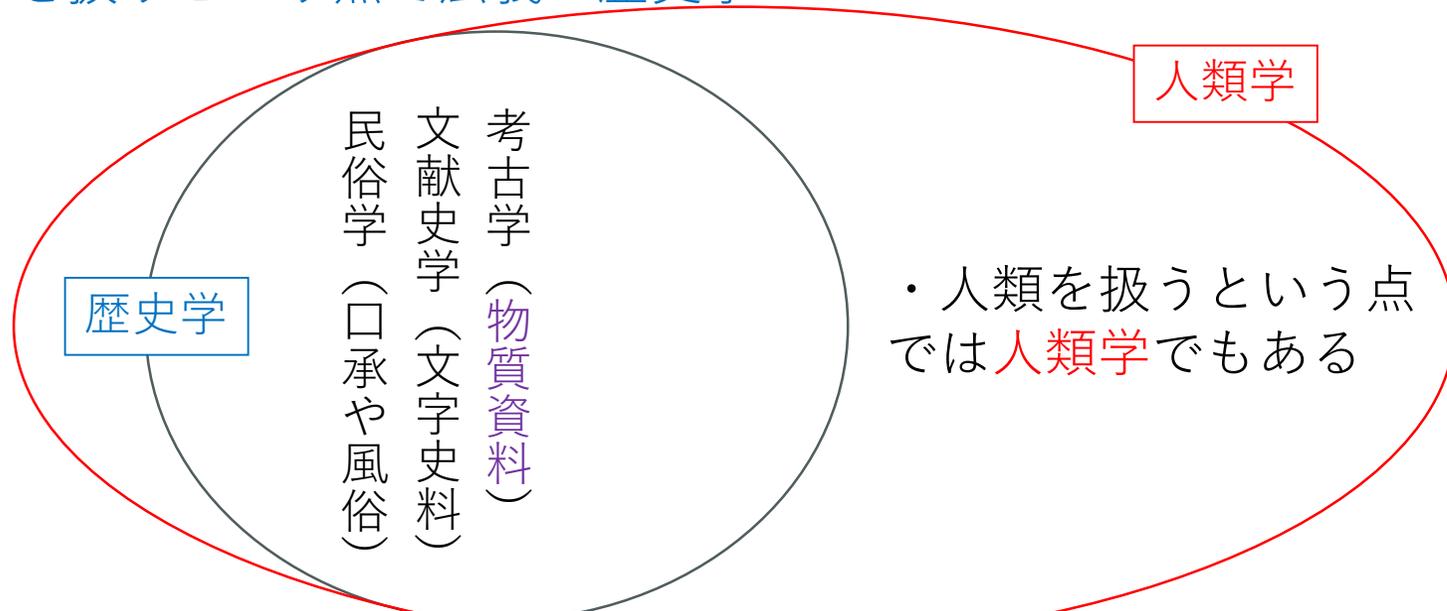
1.1 そもそも、考古学とはどんな学問なのだろう？

📖 包括的定義

「考古学は過去人類の物質的遺物に拠り人類の過去を研究するの学なり」

濱田耕作 『通論考古学』 1922年、1984年雄山閣から復刻、2016年岩波文庫化

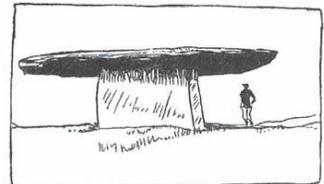
- ・ 人類出現以降の過去（現在以前の）を扱うという点で広義の歴史学



濱田耕作

通論考古学

濱田耕作著



「日本考古学の父」濱田耕作(1881-1938)の代表作。考古学の定義、発掘方法から、報告書刊行、博物館展示まで、101項目にわたり簡潔明快に説明。エジプトやギリシャの調査・研究に学んだ視野の広さは、人類史的スケールを併せもつ。考古学を志す人の基本書であるのみならず、人類文化に関心を寄せる幅広い読者に示唆を与える。(解説=春成秀爾)



青N120-1
岩波文庫

肝は研究材料、「過去人類」にかかわる「モノ」（物質的資料≡遺構・遺物）

☞ それでは、考古学はどの時代まで扱うのでしょうか？

一般には「古い」ものを扱うイメージですが・・・

*ちなみに考古学は英語でArchaeology
→ギリシャ語の古物を意味するアルカイア+学問
などを意味するロゴス、に由来しています

第二章 考古学の範囲及び目的

六、「人類過去」の範囲 吾人は考古学の定義中、「過去人類」の遺物若しくは「人類の過去」を研究すと云へるが、扱て其の過去なるもの、範囲は如何。佛蘭西の考古学者、ド・モルガン氏(De Morgan)は其の「考古学研究の目的及方法」中に、「考古学者研究の分野は、人類の出現以後、現代に至る人文の過程全部を包括す(Les Recherches archéologiques, Leur but et leurs procédés, p. 3)と云へり。是れ過去人類の物質的遺物によりて、其の過去を研究する學なりと定義せる上より見て、敢て差支なきに似たりと雖、從來學問分化の結果、自ら考古学の研究範囲の限定せらるゝものあり。即ち人類の出現後、其骨格のみを地層上に止めて、製作の遺物殆ど見る能はざる時代は、人類學者、地質學者の研究するを却て便宜とす可く、また後世文書記録等の文献的資料豊富にして、是のみを以ても略ぼ其の時代を研究するに充分なる時代は、主として歴史家の手に研究を委するを常とす。斯くて考古学者の専ら活動す可き舞臺は、人類の物質的遺物ありて、文献全く備らざる時代より、よし之を存するも未だ豊富ならず、特に同時代の文書缺乏せる時代にありと云ふを妨げず。而かも斯の如き時代は、各國各民族によりて一定せず。又た確然たる年代を以て之を劃すること難く、且つ其の必要も無し。所詮は各國に於いて所謂「古代史」に屬する部分、及び其の以前の部分は、考古学の最も力を盡す可き領域にして、文献的資料の缺乏するに従ひ、益々考古学的研究法を應用す可き必要を増加するものと言ふ可し。

我國に於いては推古朝より奈良時代に至りて、始めて文書記録の存するものありと雖も、未だ豊富なりと云ふ可からず。其の以前は僅に紀記に傳はれる傳説的歴史と支那の史乘に散見せる記事の徴す可きものあるのみ。平安朝以後に至りて、漸く同時代の文書記録の多く存するものあり、歴史家の手によりて、我國民の過去を推究するに不便なきに近し。而かも文化藝術等の方面に至りては、更に後代に至るも文献的資料缺乏す。されど先づ大體に於いて奈良朝以前は考古学の大に活動す可き時代と云ふも不可ならむ。支那に於いては、古く先秦より文献の存するもの多しと雖も、文化史的方面はなほ後代に至るも、考古学研究に俟つ可きもの大にして、唐朝及其以前は古代史に屬するものを見る可きか。

考古学の範囲及び目的

一五

濱田耕作は・・・
定義に厳密に従えば現代までだが、考古学が活躍できる時代は文献史料の不足する時代である、と説いています。
しかし同時に、それは地域や民族、分野によって一定するものではない、とも認識していました。

1.2 近・現代の考古学の位置づけ

🏠 歴史考古学の範疇でありながらどこが特異なのでしょう？

ちなみに日本ではおおむね、
近世：江戸時代（1600頃～）
近代：明治以降（1868～）
現代：昭和20年頃以降（1945頃～）

これは、あくまで政治や社会体制の違いにもとづく時期区分で、考古学の成果とは全く関連しません（それも課題ですね）

縄文/弥生/古墳の区分とは違います

① 圧倒的な物質量情報量が存在する

→ 機械化にともなう大量生産、素材の多様化、文書以外に画像や映像も出現

② 発掘調査による検証や、型式学的な遺物研究の比重が低い

→ 製作地や年代情報が存在する遺物や、現存している構造物が対象とされる割合が圧倒的に増加

③ しかし、現代に生きる私たちとの距離感は近い（親近感）

→ 「考古学」と言いながら、かかわる人たちや手法、対象範囲が多様で広い

近代化遺産の記録や研究をおこなう「産業考古学」や、近代以降の戦争関連遺構をおもな対象とする「戦跡考古学」と呼ばれるような活動とも関連しながら、ひろく市民の歴史活動としても展開されていることが、大きな特徴と言えます。

膨大な種類と量の出土遺物をどうするの

🏠 近・現代の遺跡や遺物は「埋蔵文化財」としてどのように扱われているのでしょうか？

発掘対象が無限にひろがってしまう

★埋蔵文化財として扱う範囲に関する原則

- ① おおむね中世までに属する遺跡は、原則として対象とすること。
- ② 近世に属する遺跡については、地域において必要なものを対象とすることができる。
- ③ 近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とすることができる。

<1998年の文化庁次長通知より抜粋>

つまるところ・・・

近世以降の遺跡を調査の対象とするかどうか、文化財として認定するかどうかは一律ではなく、地域のわたしたち、直接には調査を担当する自治体や機関、現場の担当者の判断に委ねられていることになります。

今回の展示は、そうした判断の産物なのです。

🏠 実際の発掘現場ではどのような状況か、ちょっと見ておきましょう (2012年・病院構内の調査から)



①通常、発掘は新しい時代から遡るように、上の層から下の層へと掘り進めます。

最初に、大学設置以前の時代の地層までの表土・攪乱（ひょうど・かくらん）を、埋積する瓦礫や残っている基礎などとともに、機械の力を利用して取り除いていきます。

近現代の遺構や遺物は、この段階で見つかることになります。

②ここでは機械掘削中に、表土中に大量の陶磁器が埋まることが判明しました（左）。

周囲の瓦礫を慎重に掘削していきながらいくつかを採集し、急ぎ洗ったところ、文字やマークがあるさまざまな食器が含まれていることがわかりました（右）。

大学や病院にかかわる重要な資料と判断されましたが、すべてを持ち帰ることは難しいので、バラエティに注意しながら若干量をサンプルとして持ち帰り、検討することにしました。

③機械掘削による表土・攪乱の除去はそのまま進み、大学以前の地層（およそ幕末～明治期前半）の上面が調査地全体であられてきました。

機械では除去できなかった煉瓦積みの地下通路のような構造物（★）も見つかりました。

詳細な年代は不明ですが、かつて共同溝として利用されていたようです。こうしたものも、「近・現代の遺構」と言えるでしょう。

一部を今回展示しています

2. 近・現代の考古学の事例

— 注目される成果から —

京都及其の附近發見の切支丹墓碑

緒言

文庫博士 新村出
文學博士 濱田耕作

大正六年より十一年に至る約六年間京都及其の附近に於いて切支丹墓碑の發見相つゞきの數凡て九基に及び其の大多數は京都帝國大學文學部に寄附若しくは寄託せらるる而かも其の年次を刻したるものは慶長七年乃至同十五年に至る九ヶ年に亘り殆ど一期を劃するに似たるは別に理由なきに非ず、こゝは吾人が本書第三章に於いて聊か論述せんとする所なるが京都地方が西教流布の一中心として當年教徒の數さしも夥しかりしに似ず、墓石の遺存するこゝ斯の如く少數なるは、西教信奉の期間僅かに一世紀に滿たす而かも其後禁壓の程度最も峻厳なりしが爲め切支丹に關係ある標章を附したる墓碑の存立條件を減殺せしこと大なりしに由らずんばあらす然れども亦た之と同時に維新以後藩城宅地の整理道路溝渠の改修等に當りて世人と共に學者の注意を之に向くるもの殆ど無かりしこと墓石湮滅の一因たらざるべしや近年大方の意を西教の遺物に注ぐもの漸く出で斯くの如く數年にして十基に

先づ記録の形式に關して諸碑通有する所を言はんか其の碑銘の上部に必ず西教徒を表明す可き記章十字形を刻することこれなり此の十字形は單簡なる等邊希臘十字より稍々裝飾的な三葉十字更に二支十字等の各種の變化あり、西教中シヤエルにより始めて布教せられ最も勢力ありし耶穌會(Societas dei Iesus)に關するものは其の教派の記章を誌せり但し單なる十字を刻したるもの、中には此會の信者なりしと云ふを得ずたゞ耶穌會の記章を附せざるもの、中には當時布教の他派フランシスコ派ドミニコ派等に屬するものありと見て可ならむ又た彼等治部右近衛將監の墓に於けるが如く十字以外に耶穌受難の時の釘の標章若しくは鎖を裝飾として應用せしものあり、これ吾人が屢々書籍の扉紙の裝飾的標章等に於いて見る所に屬す。

死者の姓名は中央に刻し之に俗姓名或は俗名と教名とを併記するものあり

山城幡枝の土器

島田貞彦

一九八

山城幡枝の土器(島田)

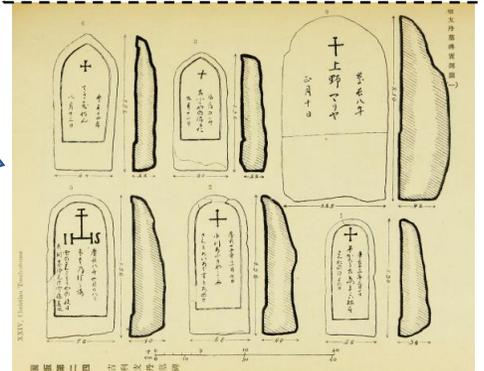
(4821に下上より右) 祝賀作製器土 圖五第

山城國愛宕郡岩村大字木野に於いては古くから土器の製作が行はれてゐる。其手法も單簡であり、従つて製作される器形に於ても粗簡な種類の域を出でないものであるが、其の製作の技術は古代土器製作を祖とし、土器製作の原始的課程を知る上一つの基準を與へるものがある。しかも此地に於ける土器製作の家庭的發達順序は多くの古記録等に徴して特殊の地位をなすものであることは一個の土器學的研究として其の價值を失はぬものである。

この意味に於いて數年來、その實を期して居つたが、其を得ることがなかつた。最近偶々、木野出身の法學士榎木義雄氏と知り、榎木家は明治維新に至るまで世々、土器製作の御土器司、榎木丸太として其家業を繼ぎ、皇室より結禮からざることを簡承するに及び、昭和五年十二月十四日、京都帝國大學文學部史學科學生有志會、中川貞雄及び喜實室員藤井武義氏等と共に木野に至り同氏を煩はし、この興味ある調査を遂行することが出来た。とりとて

一九八

総合博物館にも展示されています



『吉利支丹遺物の研究』
(京都帝國大學文學部考古學研究報告第七冊) 1926年より

島田貞彦「山城幡枝の土器」『考古學雜誌』21-3,1931年より

日本考古学の黎明期である大正～昭和初期においても、近世や同時代の遺物を対象とした考古学的な視点での研究は、墓標などの石造物を対象としたものや、土器作りの民俗調査の報告などは、すでに行われていました。

30. 近世考古学の提唱

中川 成夫・加藤 晋平

考古学の定義は広義・狭義の差はあっても物質的資料を媒介として研究するとされており、その対象とする時間の限定はされていない。従って歴史的時代区分の一つである「近世」も当然含まれる。しかし、現在のいわゆる歴史考古学の対象は、特殊のテーマを除いて中世までであった。

1966.68年の2回にヨーロッパを訪れ、いくつかの博物館を訪れることができた。それらのうち総合博物館、あるいは歴史博物館のいわゆる考古、歴史部門の展示、特に社会主義諸国においては、一民族、国民の歴史が一貫して一つのテーマのもとに展示されていた。即ち、人類、社会の進歩発展というテーマのもとで全歴史資料が統一的・立体的に展示されていることを感じた。勿論、そこには、民族主義、あるいは政治的偏向性あるものも決して少なくない。

ひるがえって日本について考えると、国立の歴史博

物館はなく、国立博物館の展示もまた美術館的である。また、いわゆる、考古・歴史の展示部門が有機的関聯の乏しい方法でなされている例を地域博物館で見ることができる。これは博物館職員の意識や能力から来ることもあるであろうが、一つには、歴史考古学の不振からの理由もあるのではなかろうか。特に地方史、地域調査への考古学者の歴史学的アプローチの方法に問題がありはしないかなどと考えたのであった。

考古学者は考古学的方法を通して全歴史へのアプローチを試みる必要がある。

近世の物質資料は考古学だけでなく、民俗学でも、地理学でも取扱っている。では考古学ではその方法を通じ、どのような形で近世を取扱うべきであろうか。私は私たちがこれまで試みてきた近世村落の復原的研究のための具体例をあげ、「近世」へ考古学的にどのようにアプローチして行くかを共に考えてみたい。

— 27 —

『日本考古学協会第35回総会研究発表要旨』1969年より

しかし、近世考古学をひとつの分野として学術的にも確かなものとするべきという提唱がされたのは1969年。そして、1970年代以降、開発に伴う埋蔵文化財の事前発掘調査の件数増加と連動して調査事例や資料も蓄積され、分野として確立して現在に至っています。

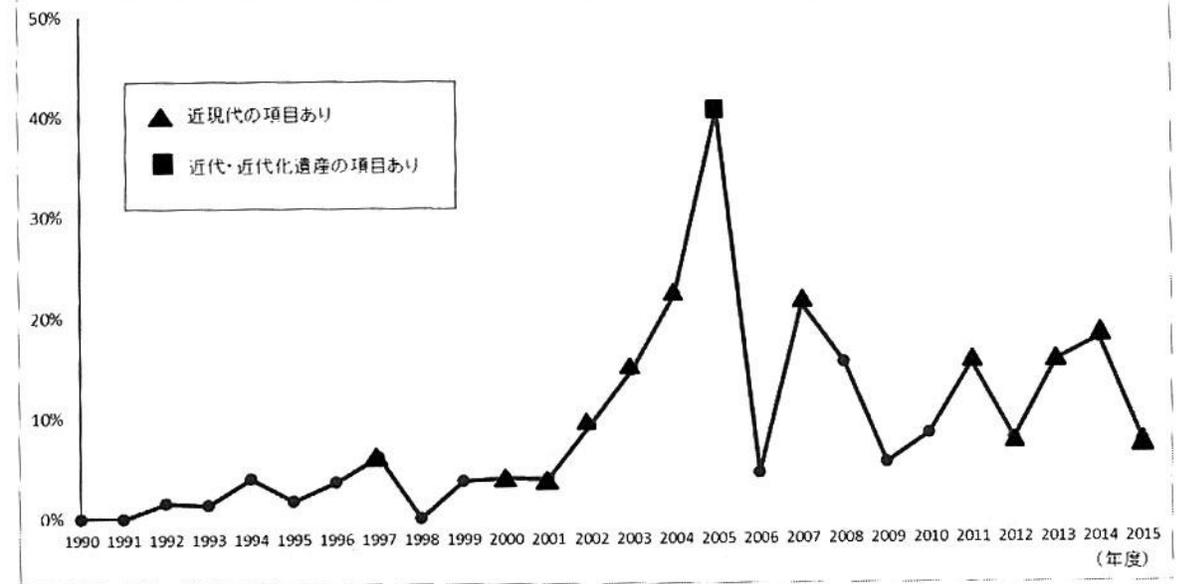


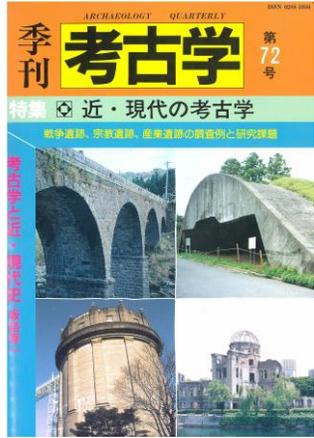
図1 『日本考古学年報』の「近世研究の動向」における近現代の割合

櫻井準也「近・現代」日本考古学協会編『日本考古学・最前線』2018年より

近・現代の考古学的な研究については、学会として認識していこうという雰囲気形成されたのが1990年代以降、おおむね平成に入ってからといえます。前述の1998年の文化庁通知にもあるように、近代以降は特別な重要性を求められることもあって、現在でも通常は調査の対象とはなっていません。

しかし、近年は観光資源としての「近代化遺産」活用の関心高まりもあって、その整備に考古学的な発掘調査も実施されるなど、事例は増加しつつあります。

注目される事例1 (あくまで私(伊藤)の関心ですが) : 東京都汐留遺跡(旧新橋駅)



旧新橋停車場の発掘

明治5年9月12日(旧暦)、日本最初の鉄道が新橋・横浜間に開通した。汐留遺跡の発掘調査によって、「新橋停車場」の開業当時の様相が明らかになってきた。開業時の施設として記録に残っているものは、駅舎・乗車場・客車庫・荷物庫・荷物積所・板倉・石炭庫・機関車庫・インジニール(エンジニア)官舎・外国人職工官舎・機関車修復所・転車台などで、ほぼ発掘調査によって確認ができた。
構成/佐藤 政 写真提供/東京都埋蔵文化財センター



駅舎とプラットホーム全景

新橋駅の考古学

福田敏一 著
Fukuda Toshikazu



明治5年日本最初の鉄道駅として開業し、大正3年中央駅(東京駅)開業とともに汐留貨物駅となるまでの新橋駅の変遷を10年に及ぶ発掘調査をもとに解明する。
雄山閣
定価4,830円
本体4,000円+税

福田敏一『新橋駅の考古学』2004年5月

1991年から10年間にわたり発掘された、日本最初の鉄道の駅。近代化に関連する遺跡の大規模で本格的な調査は、近・現代の考古学の必要性と重要性をひろく伝え、研究への関心を高める機会となりました。

旧新橋駅の駅舎基礎やプラットホームの一部は国指定史跡として保存され、現地に復元されて歴史展示室として公開されています。
<https://www.ejrcf.or.jp/shinbashi/>

2000年代以降になると、近・現代を対象とする学術誌の特集や研究書も増えてきます。

下層には江戸時代の大名家敷群が埋もれています。



上:開業時の転車台(直径13m 機関車用)
下:転車台の基礎(松杭1828本)



明治9年以降に使用された乗車券(赤外線写真)



明治35年に建設された火力発電所



汽車土瓶(明治22年、静岡駅でお茶の販売開始)

汽車土瓶は京都大学の本部構内からも出土しています。

注目される事例2：群馬県富岡製糸場

未来に伝える 富岡製糸場の歴史

～発掘調査からみた製糸場の記憶～

平成27年12月4日(金)～20日(日)

メイン会場
「遺構と遺物が語る富岡製糸場の歴史展」
富岡市立美術博物館 午前9時30分～午後5時
7日(月)・14日(月)は休館日

サテライト会場
「遺物からみた工女の暮らし展」
富岡市社会教育館 午前9時～午後5時
7日(月)・14日(月)は休館日

遺跡説明会 13日(日)・19日(土) 午後1時30分～3時(美術博物館創作室)



平成27年度文化庁文化芸術振興費補助金(文化遺産を活かした地域活性化事業)
主催：富岡市世界文化遺産活性化事業実行委員会
事務局：富岡市教育委員会文化財保護課 TEL 0274-62-1511(内線1384)

平成26年に世界遺産に登録された富岡製糸場は、明治5年に操業開始した日本で最初の官営模範製糸工場です。敷地全体は史跡に指定されており、地下遺構についても数多く残っていることが想定されています。富岡市教育委員会では平成23年度から保存整備事業に伴う発掘調査を行っています。

調査では、すでに失われた建物跡や遺物などが出土し、文献や史料では不明瞭だった富岡製糸場の歴史が鮮やかに浮かび上がってきました。今回の展示では、これまでの発掘調査の成果の一部をご覧ください。

メイン会場 「遺構と遺物が語る富岡製糸場の歴史展」

富岡市立美術博物館 市民ギャラリー 富岡市黒川 もみじ平総合公園内(入場無料)

発掘調査では様々な遺構が発見されました。調査成果を写真パネルなどでご覧いただけます。遺物は、主に木骨煉瓦造の建物に使われた煉瓦が多く出土しています。煉瓦には様々な刻印が押され、なかには官営当初頃につくられた「横須賀造船所」の刻印が入った煉瓦もありました。また、ボイラーなどで使われた耐火煉瓦、かつての織糸器で使われた信楽産の陶器製品(織糸鍋・煮崩鍋等)や場内生活で使われた食器類など、各時代に使われた遺物を展示します。

※13日(日)・19日(土)には、これまでの発掘調査の成果を概説する説明会も開催します。

美術博物館創作室13:30～15:00



普通煉瓦(官営期)



工場食器(戦前～戦後)



代用陶器ピン(戦前)

サテライト会場 「遺物からみた工女の暮らし展」

富岡市社会教育館 応接室(旧館長室) 富岡市ノ宮(入場無料)

明治5年に操業開始した製糸場内では、全国から集まった大勢の工女が寄宿生活を送ることになりました。女性に欠かせない化粧品などの容器など、明治時代から昭和にかけて、工女が使った遺物をご覧ください。

会場となる社会教育館は昭和9年(1934年)の建物で、近代和風建築としての価値が高く国登録有形文化財となっています。併せてご覧ください。



紅皿(官営期)



クリームビン(戦前)



香水ビン(戦後)

アクセス

☆富岡市立美術博物館 ☆富岡市社会教育館

上信越自動車道富岡IC及び下仁田ICから車で15分

上信電鉄上州富岡駅からタクシーで10分

または乗合タクシー(日曜運休)で10分

JR信越線磯部駅からタクシーで10分

☆富岡製糸場

上信越自動車道富岡IC下車、各駐車場まで車で約10分

各駐車場より徒歩約10分～15分

上信電鉄上州富岡駅下車、徒歩約15分(1km)



日本の近代化遺産として、世界遺産にも登録された富岡製糸場は、その整備に積極的に考古学的な発掘調査を実施し、成果の活用が進められていることが注目されます。

文書や写真からは詳細にうかがえなかった施設の造営技術や、製糸場にかかわっていた人たちの日常を知らせる資料群が出土しています

注目される事例3：兵庫県神戸市旧外国人居留地遺跡・灘五郷酒造関連施設群

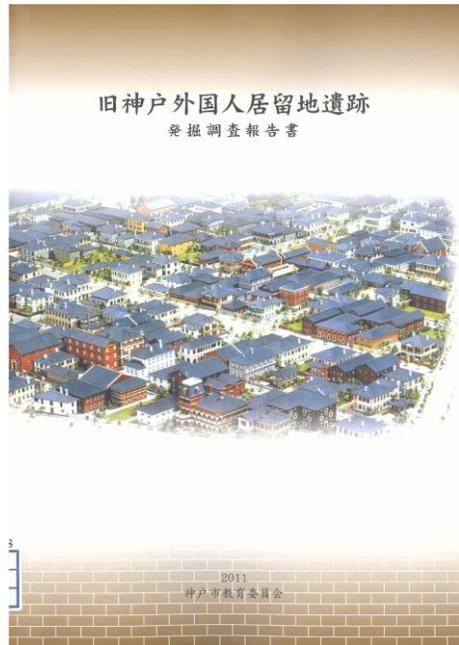


写真2 調査地周辺

神戸では、幕末期に開港され開発が進んだ三宮地区一帯の旧外国人居留地や鉄道・港湾施設跡、また「灘五郷」として知られるような近世以来の酒造関連施設がひろがる地区（魚崎郷・御影郷・西郷など）が、遺跡として登録されて発掘調査が行われています。

三宮の官庁街の地下に、明治期に輸出された茶葉の加工工場の基礎が残されていました。レンガをはじめ、目地や床のモルタルなども含めた材質分析など、多面的な検討が報告されています。



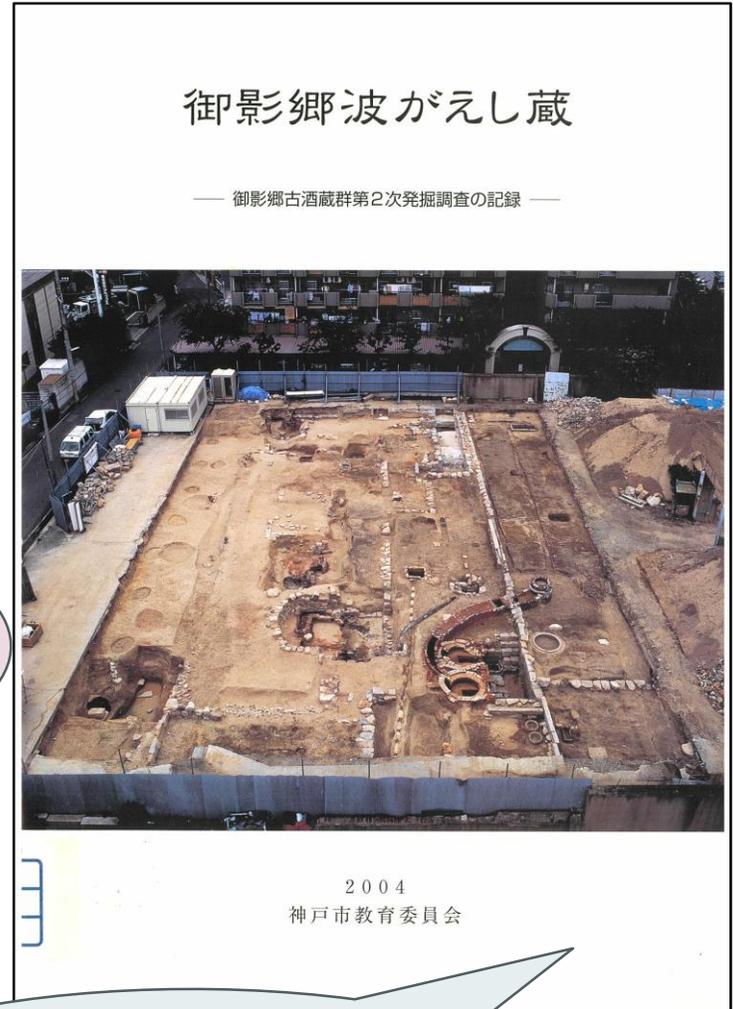
写真12 目地 煉瓦間



写真33 捺行された刻印

写真34 磨書のある煉瓦

レンガは、刻印などから製作地が特定できるものも有り、流通の手がかりとなります。また、製作技法や積み方など研究の蓄積が厚い遺物です。



阪神淡路大震災により多くの酒蔵が倒壊廃業した現在、遺存する地下構造部の調査は、伝統的な酒造技術を記録伝承していく上でも重要な作業となっています。

注目される事例4：広島被爆遺構・国立ハンセン病療養所の調査



毎日新聞大阪版朝刊2017年1月20日の記事から

広島市では、平和記念公園一帯で、被爆遺構の保存や、以前の街並みと生活文化の復元が発掘調査も含めて進められています。

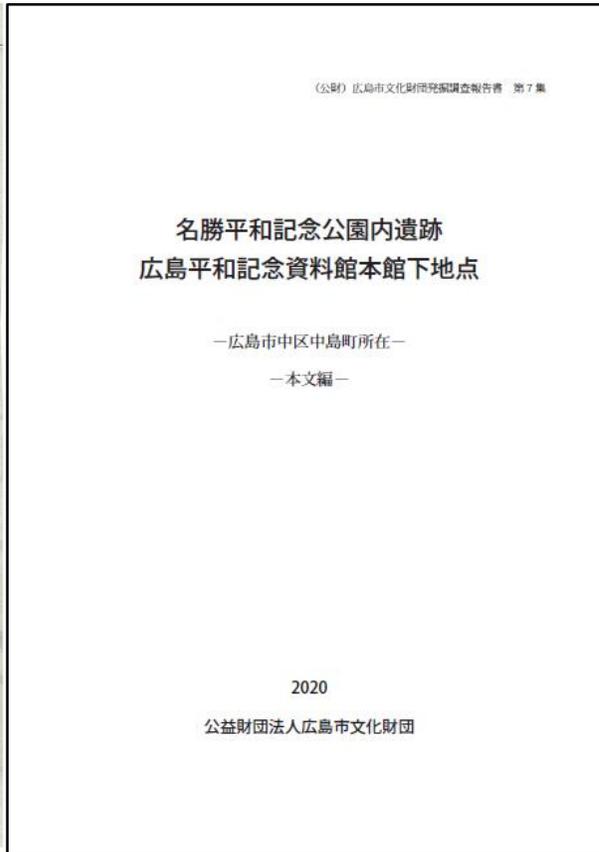


写真2 被爆時の高熱火災で溶けた牛乳瓶

療養所の開所時に築かれていた大規模な堀が発掘調査によって姿を現しました

こうした「かつての日常」や「負の遺産」と言えるものの可視化と記憶の継承という点でも、考古学的な調査は大きな役割を果たしていると言えます。

報告書も含めたすべての発掘情報は「ひろしまWEB博物館」でも公開されています
<http://www.mogurin.or.jp/>



毎日新聞東京夕刊web版2016年12月22日の記事から

3. 近・現代の考古学と京都大学構内遺跡

3.1 京都大学構内での現況

今回の展示遺物が出土している発掘調査も含めて、京都大学構内では、近・現代の遺跡を主目的にした発掘調査は行われたことはなく、大学設置以前の時期を対象とすることを原則にしています。

しかし、さきに病院構内の事例を紹介したように、大学あるいは地域の歴史に重要と判断される遺構や遺物に遭遇することがあります。また、時代の推移や研究の深化によって、後世には歴史的に重要と認識される可能性は否定できません。

そうした事情を考慮して、どのような調査でも可能な限りで学術的な記録や資料を確保できるような意識で発掘を行い、明らかに重要度の高いものは、近世以前の遺跡と同じ精度の調査を及ぼす方針で常に調査に臨んでいます。

🏠 興味深い事例いくつか

(いずれも『京都大学構内遺跡調査研究年報』に報告されています)

① 戦時下の大学を彷彿とさせる陶製模擬手榴弾の出土



2002年、本部構内の百周年時計台記念館改修に付随した工事の際に、大量に掘り出されました。全く同じものが信楽に保管されており、形態から練習用の陶製模擬手榴弾とみられます。

第二次大戦中には大学でも軍事教練が科目として行われていましたが、それに使用されたものでしょう。

②三高創設時の寄宿舍遺構

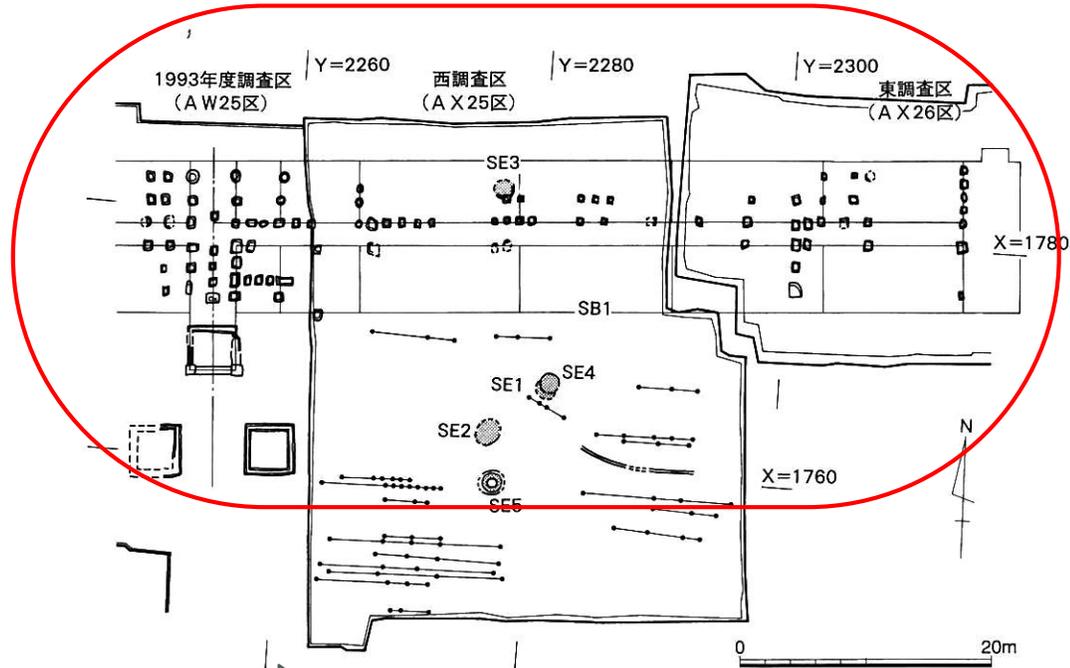


図48 近世・近代の遺構 縮尺1/600

古賀秀策「京都大学本部構内AX25・AX26区の発掘調査」
『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』1999年より

本部構内中央の文学部校舎の建て替えて、方70cm程度で割栗石を充填した柱列が東西に長く見つかりました。明治22年（1889）に竣工した木造寄宿舍東半の基礎列と想定されます。東西に長大な木造三階建てであったと言われていますが、120m以上の規模であったことがわかりました。旧制高校創設当時の建造物について、詳細な情報を把握するための貴重な事例と言えます。

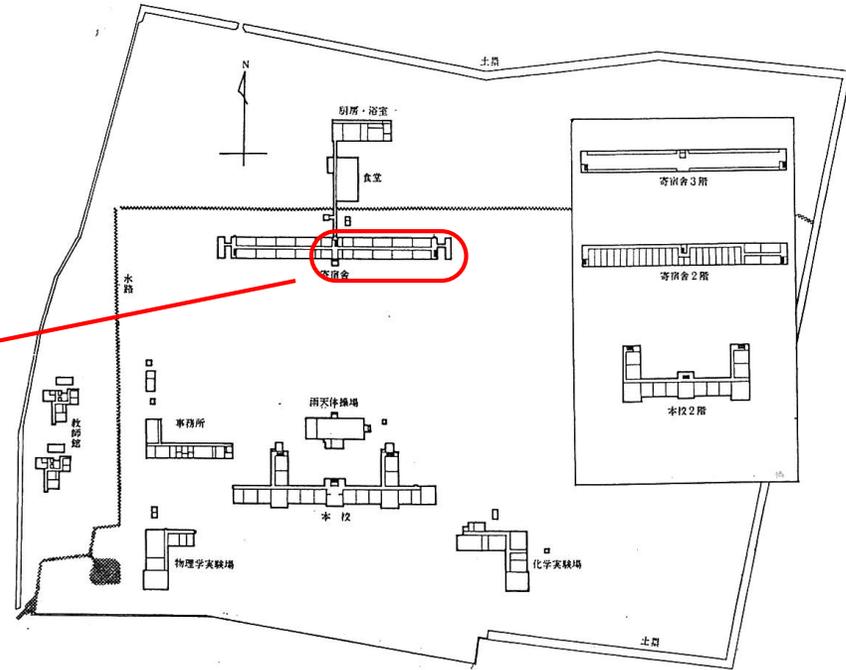


図2-(1)-1 第三高等学校校吉田学舎建物配置図



写2-(1)-6 第三高等学校校吉田学舎寄宿舍<講談社提供>

『京都大学建築80年のあゆみ』1977年より

③時計台北側謎の煙突



『京都帝国大学史』1943年より

2002年の百周年時計台記念館改修にともなう発掘調査では、北側にあった煙突の基礎や、大正14年（1925）建造の時計台の前身建物である帝国大学本館の基礎と思われるものも見つかりました。

煙突は、北側にあったボイラー室に付属するもので、昭和29年（1954）頃の写真までは黒煙を上げる姿が確認できますが、詳細はわかりません。暖房等に利用されたとみられますが、環境や景観への意識が現在と異なっていたことがうかがわれます。



こちらは、時計台に先行して建っていた帝国大学本館の基礎とみられます。



岡山県備前産の耐火煉瓦が幾重にも重ねられた頑強な煙道が残っていました。

④吉田キャンパス以外の遺構

宇治キャンパス MAP

碧水舎

京都大学化学研究所創立 100 周年基金
ご支援のお願い

化学研究所は、京都大学基金の中に「化学研究所創立100周年基金」を創設しました。その目的は、2026年の創立100周年記念行事の開催、教育・研究環境の整備、社会貢献活動です。趣旨にご理解いただき、ご支援賜りますよう、お願い申し上げます。

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/chemical/>

【碧水舎のご利用にあたって】

- 使用責任者は、化学研究所に所属する常勤教職員と規定されています。使用申請は、化学研究所会議室等予約システムより行い、「碧水舎使用に関する内規」をご確認のうえ、ご利用いただきますようお願いいたします。
- 鍵は、化学研究所担当事務室で「鍵貸出帳」に記入して借りてください。
- 貸出可能な備品は机(3人掛)16台、椅子 50脚、スクリーン1台、プロジェクター 1台です。

●注意事項●

- 使用後は、設備品を元の配置に戻してください。
- 使用後は必ず照明器具およびエアコン等の電源を切って、鍵は速やかに返却してください。
- 使用後は、歴史展示資料について、異常がないか確認してください。
- 万一、紛失あるいは汚損があった場合は化学研究所担当事務室まで報告してください。

京都大学 化学研究所
〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄
TEL:0774-38-3344 FAX:0774-38-3014
<https://www.kuicr.kyoto-u.ac.jp>
2018年10月発行

建物と名前の由来

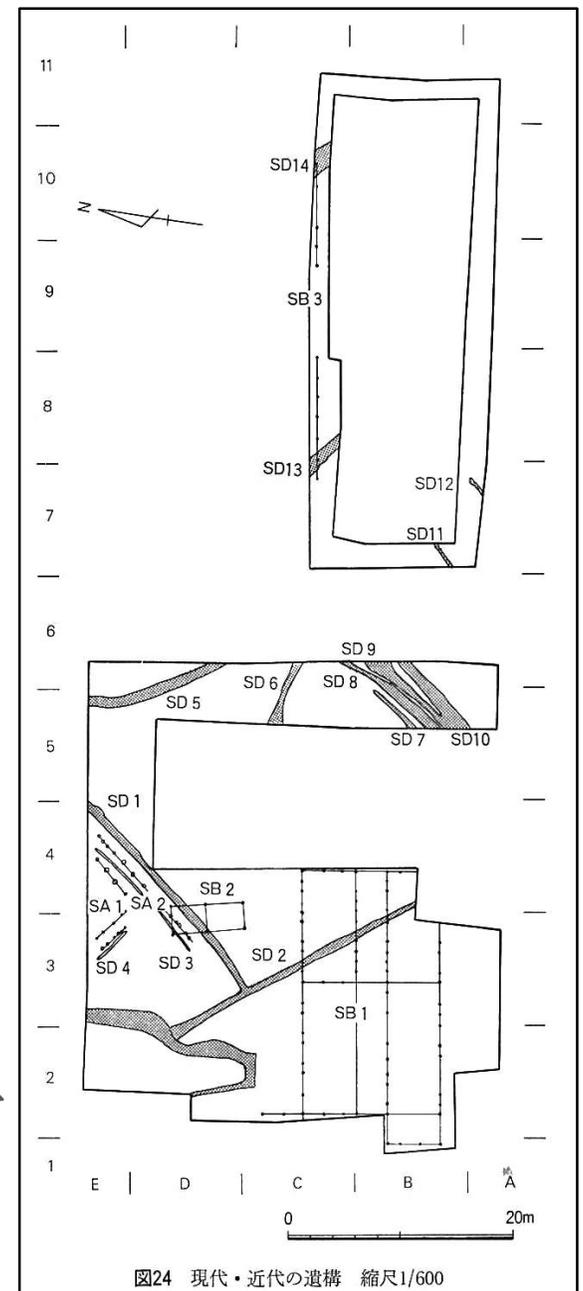
化学研究所 90 周年記念事業の一環として誕生した「碧水舎」は、旧陸軍の火薬庫として建設されました。その後京都大学教養部の講義棟として、昭和43年の化学研究所の宇治移転の後は、無機材料化学系の窯業化学実験工場として使用され、長年にわたり宇治地区で重要な役割を担ってきた歴史ある建造物です。

「碧水舎」という名称は、化学研究所同窓会「碧水会」にちなんでいます。「碧水」とは「あお色に深く澄んだ水」という意味です。「碧水会」は、当時大阪の高槻にあった化学研究所の近くを流れる淀川から連想され、「若々しい気持ち」との意を込めて名付けられました。宇治川に近い現在の化学研究所にも縁ある名称として、2007(平成19)年に同窓会組織として発足した「碧水会」に継承され、世代を超えて連携を深めるプラットフォーム「碧水舎」にも引き継がれています。

『碧水舎』2018年京都大学化学研究所発行のパンフレットより

宇治キャンパスは旧陸軍の敷地を1949年に譲り受けたもので、火薬製造所の跡地でした。発掘調査は行われていませんが、建造物として当時の施設の一部が残されています。

京都府京丹波町所在の農学部附属牧場は、旧海軍の敷地でした。弥生～中世を中心とする美月遺跡として知られていますが、上面からは兵舎跡とみられる方形建物の柱穴列が確認されています。



清水芳裕「京都府美月遺跡の発掘調査」
『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』1983年より

これから調べてみたいこと

年譜

明治三十七年

発電所

給水場



1975年撮影の空中写真（国土地理院CKK7415-C5-18より）



都市計画図に残る吉田山上の「京都大学水源地」の記載

本學給水は其水源を愛宕郡白川村宇松ヶ谷の溪流に取り主に之を本學各所の飲用又は防火用の爲めに供給す今其設計の概要を擧ぐれば左の如し給水管は徑五吋鐵管にして叡山道を過ぎ白川村を経て吉田町神樂岡東麓に沿ひ吉田山の南隅に設くる貯水場に至り濾過池を経て淨水池に貯へ更に徑四吋鐵管二條によりて本學構内各所に通ず淨水場は面積七百六十八坪にして濾過池三個淨水池二個を設く之れより二道の鐵管を敷設し一は理工科大學、法科大學、寄宿舍、圖書館を経て醫科大學に及び一は醫科大學附屬醫院に供給す防火用としては鐵管各所に「ハイドラント」を設け之に「フォース」を設備す

発電所は中央及補助発電所の二ヶ所より成り中央発電所は平家建煉瓦造にして本學構内の東隅に設置す而して汽機室に装置せる主なる機械は四十「キロワット」直立式発電機一基、十二・五「キロワット」直立式発電機二基、五十「キロワット」

No. 168

京大広報

<大学の動き>

吉田地区、宇治地区における水の節約

最近、水資源の確保が重要な問題となっている。以下において、この問題について本学の現状を報告し、あわせて節約への配慮をお願いしたい。

本学では、教育・研究の進展に伴い建物の整備、拡充が計られ、水の需要が年々増加し、特に夏期の最大需要時に安定した供給を行なうのに非常に苦慮している。

吉田地区における給水量は、1日約10,500m³に達し、これを各構内にある7か所の自家給水施設（ポンプ室）で汲み上げる井水（全体の75%）と、明治38年から吉田山浄水場を経て送水されている山水（5%）で大半を賄い、不足分は市水道（20%）を導入して補っている。

水の安定した供給を計るため、毎年、老朽管の整備を行ない、漏水の防止に努めるとともに、夜間貯水による昼間の需要への対応等、限られた水を有効に利用するため、本学地区給水センターを設置し、日常の保守管理業務の充実を計る一方、既設井戸の整備（53年度実施）、井戸の増強（54年度予定）、病院地区給水センターの設置（55年度以降）等の年次的な給水施設の整備充実を計画している。

また、宇治地区においては、現在2か所の自家給水施設より、1日約2,700m³の井水を供給して

いるが、第2給水センターの設置（54年度竣工予定）、第1給水センターの大巾改修（54年度予定）により水の供給状態の改善を計る予定である。

しかし、給水施設の整備と日常の保守管理業務の強化とともに、利用される側においても無駄の防止、合理的な水の使用が要求される。

例えば、実験用のピペット洗滌器、水流ポンプ（アスピレーター）、機器冷却用の水栓等の使用については、改善されるべき点が多量である。これらに要する1台当りの水量ならびに経費を推計すると次のとおりとなる。

	（1日の使用）（1日当りの）（年間）		
	用水量	市水経費	
	と	円	
ピペット洗滌器	4,000	820	246,000
水流ポンプ	11,000	2,255	676,500
機器冷却用水栓	40,300	8,261	2,478,300

これらに類する器具等の使用は、大学全体で相当数になるものと思われるが、使用方法の検討ならびに循環方式の採用によって多量の水の節約が可能と考えられる。また水栓パッキン、冷却塔等より生じる漏水の損失も大きく、日常から整備を心がけることが、経費節約の面からも非常に重要である。

各部局において、水資源の有限性、水の貴重さに対する関心を高め“一滴も無駄にできない”という認識を持ち、もう一度使い方に対する再検討を重ねてお願いする。（施設部）



受水槽入り口 東



受水槽入り口 西

『京都大学施設部のあゆみ』1998年より

明治30年代以降、帝国大学設立に伴い構内のインフラ整備も大規模に進められました。給水は昭和時代まで比叡山麓の白川からはるばる給水し吉田山上で貯水したものが利用されていました。日本の近代化とともに作られてきたこのような施設は、急速に失われ忘れられつつあります。地域の歩みとも密接に関連するこうした大学インフラ関連の遺構や遺物を調査しながら、その歴史や意義を考えていきたいと思っています。

3.2 これからの課題と展望

今回の展示にみるように、京都大学構内から出土する近・現代の遺物も蓄積が進んでおり、分析の視覚をさまざまに設定して、興味深い研究成果を導き出すことが可能になってきていると言えます。

ただ、ここで垣間見ていただいたように、調査の事例はいくつもありますが、体系的なものではありません。また、地域や大学の歴史資源としての活用も、緒に就いたばかりと言えます。各地の先行事例を参照しながらまだまだ研鑽を重ねることが課題です。

そして、近・現代の歴史的に重要と認定されるもののみ限定されることが、行政的な発掘調査成果に多くを依拠している現在の日本考古学での実情と言えます。しかし、京都大学構内は、それ自体が100年を超える歴史を有するキャンパスの歩みの場として、地域にも重要な影響を与えながら歴史を刻んできた空間です。文書ではこぼれ落ちる部分をすくい上げる考古学、という特性を活かしながら、大学外では捨象されてしまう調査が、大学構内という空間であるからこそ可能とできる空間、ともいえます。このような利点を十分に意識しながら、これからも調査研究を続け、成果の活用を知恵を絞りたいと思っています。